

実践報告「高等学校における対話型鑑賞の取り組みから」
学習活動における開かれた対話を導くための一考察

和歌山県立粉河高等学校教諭
南 洋平

はじめに

新しい学習指導要領では、生きる力をはぐくむことを目指し、思考力・判断力・表現力等を育成するため、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動が重視されている。その際特に、知識活動やコミュニケーション、感性・情操の基盤となる言語の重要性を踏まえて、言語活動を充実することとしている。これをふまえ、美術科の鑑賞授業の充実化を模索する中、2014年3月に行われた、日本文教出版の鑑賞用副教材『みる・考える・話す・聴く 鑑賞によるコミュニケーション教育』の刊行記念セミナー（以下セミナーと記す）を受講する機会に恵まれた。

このセミナーは、副教材の制作を担当した京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターが主催する、副教材の活用法を踏まえた対話型鑑賞の実践をテーマとするものであった。本稿では、セミナーを受講した経験を活かし、対話型鑑賞における言語活動の充実を目指して、試行をもとに実施した取り組みについて報告したい。

対話型鑑賞について

対話型鑑賞は、思考やコミュニケーションに関する能力の向上に有効とされる、開かれた学びの要素をもつ作品鑑賞活動を指す。活動では、鑑賞者主体の自由な意見交流を大切に、作品の世界に主体的に触れ、その内容を読み解いていく。指導者は、一方的に知識を与えるのではなく、ファシリテーター（対話をつなげる重要な役割）として、対話を充実させるために、鑑賞者に向けた働きかけを行う。

この活動の教育的意義は、作品をよく見ることをきっかけに、対話を通じて、論理的に思考する力、考えを整理し他者に言葉で分かり易く伝える力、他者の意見を聞いて理解する力等の、広く言語活動を伴った思考やコミュニケーションに関わる能力の育成にある。

またセミナーの受講を通じて、印象に残った点をごく簡単に述べると、対話型鑑賞は「みる・考える・話す・聴く」という、4つの基本的な活動から構成されること、またコミュニケーション活動を効果的に行うために、ある発言が『FACT』（客観的事実）なのか『TRUTH』（主観的解釈）なのかを意識すること、等が挙げられる。その他、効果的な鑑賞活動が促進されるために、現場や学習者の状況に応じた柔軟な学習形態を考えることの大切さについても、確認できた。

対話型鑑賞に関わる授業展開の検討

対話型鑑賞を、学習活動において充実した形で行うためには、作品に対する自由な発言を促す雰囲気づくりが大切である。しかし自由な発言を促す雰囲気は、日常展開される一般的な学習活動とは性質が異なるため、広く浸透させることが難しい。また発達段階からも高校生は、学習活動において自らの自由な意

見を述べることに對し、抵抗感を示す傾向がある。さらに本校を例に挙げると、芸術科目の選択集団は複数クラスによる合同編成のため、集団における親密な人間関係が構築されにくい。

従って本考察においては、対話型鑑賞の充実のための重要課題を、学習活動における「開かれた対話を導く雰囲気づくり」と捉え、その考えに沿った段階的な授業展開を考えた。授業展開は、生徒へのアンケート等も参考にしながら検討し、2種類の内容を実施した。授業展開Aは1学期に、授業展開Bは2学期にそれぞれ実施した。

授業展開A

授業展開A（以下展開Aと記す）では、対話型鑑賞の学習経験の少ない初期段階においては、少人数での学習から開始することで、開かれた対話を導く雰囲気が構築されやすいと仮定した。具体的には、少人数でのグループ学習を2回実施した後に、対話型鑑賞の形式として、学習集団全体での活動を実施した。また、グループ活動においては、「テーマ」を設けることで活動の目的を明確にし、生徒相互の対話を導きやすくした。以下に展開の概要を示す。

【第1次】

グループでの活動。教師が作品鑑賞における「テーマ」を設定する。スクリーンに投影された作品画像に對し、生徒はグループ内で「テーマ」についての意見交流を行う。教師はグループ別に関わる。

【第2次】

グループを中心に活動。「テーマ」は設定せず、自由に作品鑑賞を行う。スクリーンに投影された画像に對し、生徒はグループで意見交流を行った後、意見をまとめて全体に紹介する。教師は主に、グループ別に関わる。

【第3次】

学習集団全体で活動。一般的な対話型鑑賞の形式で机を払い、クラス全体で半円の陣形になり、スクリーンに投影された作品の画像を囲む。作品を鑑賞する中で、全員で意見交流を行う。教師は全員の生徒と関わる。

実践の結果

一定の学習効果は、生徒へのアンケートの結果から確認できた。しかし授業を実施した実感として、活動が全員の生徒のものになっておらず、特に対話の広がりがすべての生徒に及んでいないことについての問題点を感じた。また1次、2次のグループ単位での活動においては、積極的な生徒が少ないグループでは、対話がうまくつながらずに沈黙が流れる事が頻繁にあった。さらに第3次の対話型鑑賞においては、興味をもって作品画面を見ている生徒は多そうではあるが、発言の機会となると顕著に遠慮し合っている様子が感じられた。

以上から検討する中で、展開Aの学習活動には、開かれた対話を導く雰囲気を学習集団に構築する上で、足りない部分があると判断した。従って学習活動の初期段階における、生徒の達成度を高める取り組みが必要だと感じた。

授業展開 B

授業展開 B（以下展開 B と記す）では、展開 A での結果を踏まえ、対話活動の魅力を生徒全員が味わうことができるように、2 人組から始まる授業展開を考案した。またグループでの活動においては、生徒同士で活動成果の振り返りを行いやすくするため、対話内容の、模造紙への記述を行うことにした。

【第 1 次】

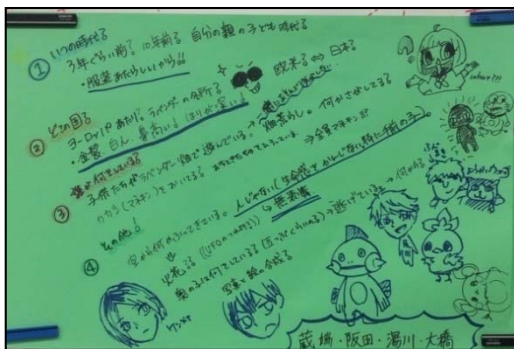
2 人組で活動。作品を前に 1 人が目隠しをする。決められた時間内に、一方が言葉で作品の説明を行い、目隠しをしたペアに絵の印象がどれだけ伝わっているかを試す。事後に簡単なスケッチを行うことで伝達内容を確認する。本活動は、セミナーで体験した「ブラインド・トーク」を参考にしている。

【第 2 次】

グループでの活動。スクリーンに投影された作品についてあらかじめ教師が用意した「テーマ」に対する回答を、模造紙に書き出す。文字の色や画面のレイアウトは一任するが、話し合いの中で出た意見は、全て書き出す。活動後、全員で各グループの成果を鑑賞し合う。

【第 3 次】

学習集団全体による活動。一般的な対話型鑑賞の形式で机を払い、クラス全員で半円の陣形で、スクリーンに投影された作品の画像を囲む。作品を鑑賞する中で、全員で意見交流を行う。教師は全員の生徒と関わる。



模造紙への記述



グループ活動

実践の結果

第 1 次の活動はゲーム性が強く、また短い時間の中で、話す、聴き返すといった活動を集中して行うことにより、全ての生徒が活動に参加でき、作品を介した意義のある対話活動を行うことができた。事後に実施したアンケートによると、この学習活動への生徒の意欲が最も高く、「楽しかった」、「普段しゃべらない子としゃべれる」等の観点からの意見が多くあった。第 2 次の活動では、模造紙への記述を活動に取り入れることで、グループでの活動が成果として視覚的に確認できた。アンケートからは、「活動の内容が、模造紙に書くことによって目で見えるから分かりやすい」、「少人数で話しやすい」等の意見が確認できた。第 3 次では、展開 A の実施時と比較して、積極的な対話が展開された点と、活動の場の雰囲気や一体感が

感じられた点が特徴的であった。また学習集団全員で考えを共有できる点で、大人数で鑑賞を行う上での利点が確認された。アンケートからは、「みんなの意見を聞くことで、深く考えることができた。」「みんなの意見を聞けるから楽しかった」等の回答が多数確認することができた。

2つの実践結果を踏まえた考察

アンケートの結果によると、展開Aよりも展開Bの方が、対話を広げる学習展開として有効であると答えた生徒が90パーセントにのぼった。実際、展開Bにおいては、発言に対する笑いや驚きといった様々な反応が起こり、展開Aに見られたような、対話が続き無言のまま時間が流れることはあまりなかった。このことから、展開Bの方が、教室における鑑賞空間としての一体感がより形成されていたように感じられた。

この展開において心掛けた点は、2人組での活動から学習集団全員による活動へと移行する点、及びアイマスクや模造紙といった、対話活動を補助的に補う要素を取り入れた点である。これらの活用によって、作品をよく見ることから始まる対話活動の魅力を、より多くの生徒が知的好奇心をもって体験できたようである。今回実施した2種類の授業展開は、共に同じ生徒集団に対するものであった。従ってこの点においては、学習活動の継続性に関わる、生徒の習熟度を考慮に入れる必要があったといえる。しかし活動を通じて、学習展開の意義に関する一定の考察は行うことができたと感じている。

続いて、一連の学習活動における生徒の学習意欲について振り返りたい。特に展開Bに対する生徒の学習意欲が高く、授業後の感想では生徒全体の98パーセントが、「大変有意義な活動である」と回答した。その理由は、「みんなの意見が聞けてよかった」、「みんなと色々書いたり、話し合ったりするのが楽しかった」等の意見が多く、このことから、作品を主体的に読み解くことへの興味関心と共に、お互いの意見や考え方に対する興味関心の高さが伺える。多くの生徒が、作品鑑賞を媒介とした相互のコミュニケーション活動を求めていることを示しており、これらの意見は、今回の学習活動における、生徒の学習意欲を示す資料といえる。

それでは対話型鑑賞を通じて身に付く力について、生徒はどのように考えているのだろうか。各回答における生徒の意見を大まかにまとめると、「コミュニケーション力」や「考える力」、「発想力」、「観察力」といった意見に集約された。これは、対話型鑑賞によって獲得できる複合的な能力について、生徒自身が活動を通じて実感できていることを示している。また、一連の活動による生徒の興味深い回答を紹介すると、「全体的にそういう活動をするのは脳にいいと思う。」、「物事の本質を見る目が付くのではないかとと思う」、「自分の意見をたくさん人に伝えられるので、社会に出たとき役立つと思う」等の意見があった。その他、「積極性が付く」、「みんなが仲良くなる」等の回答も、コミュニケーション活動が基盤となる、本活動における特徴的な意見といえる。広く作品を介したコミュニケーション活動によって、学習集団の中に、お互いを肯定的に認め合うような雰囲気生まれてきていることを感じた。

最後に生徒にとっての充実した活動の支援者である、ファシリテーターとしての教師の重要性について、感じたことを述べたい。生徒の発言を意義ある方法につないでゆくのはファシリテーターの力である。そのためには、ファシリテーターとしての教師が、事前準備を通じて作品に対する知識の保持や理解を行えていることが、重要になってくるのではないだろうか。このような事前の教師側の入念な準備があればこ

そ、良きファシリテーターとして鑑賞者の言葉を整理して、適切につなぎ、それらを構造化することが可能になってくる。また、学習のねらいを明確に設定した上で、自由な対話を導く雰囲気を尊重し、生徒の発言を肯定的に受け止める意識も大切である。この受容意識から生まれる柔らかい場の雰囲気の形成は、対話型鑑賞の活動を行う上で非常に特徴的で意義深い部分であり、ファシリテーターとしての教師の重要な役割を担う部分であると感じた。

おわりに

今回の実践報告は短時間で行った考察であり、十分な活動や検証は行えていない。しかし、アンケートの内容を踏まえて学習活動を検証する中で、対話型鑑賞の可能性については十分に確認することができた。

言語活動の充実に伴う、基礎的・基本的な知識及び技能の習得と、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力を育むことは、生徒にとって有意義な活動となる。今後、対話型鑑賞を様々なアプローチから実践し、また自分自身も学ぶ心を持ち続けることで、考察を深めていきたい。

【参考文献】

京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター『みる・考える・話す・聴く 鑑賞によるコミュニケーション教育』 日本文教出版、2013

文部科学省『言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～高等学校版』 教育出版、2011

アメリカ・アレナス『MITE! ティーチャーズキット1～3』 淡交社、2005（鑑賞教材として活用）

フィリップ・ヤノウィン『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』 京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 訳、淡交社、2015